

平成28年度（第5回）二宮町社会教育委員会議 会議録

日 時：平成29年1月24日（火）13時30分より

場 所：二宮町生涯学習センターラディアン ミーティングルーム1

出席者：（社会教育委員） 野村幸雄委員長、橘川昭夫副委員長、江見千秋委員、
久保田秀実委員、関口金由紀委員、蓮實茂夫委員、
三宅栄子委員、目黒美砂緒委員
（事務局） 府川教育長、鐘ヶ江教育部長兼生涯学習課長、小嶋生涯学習・
スポーツ班長、佐藤主事

傍聴者 1名

資料

- ・会議次第
- ・研究テーマ「将来を担う青少年の健全育成について」

1 開 会

2 議題

社会教育における地域づくり・人づくり「将来を担う青少年の健全育成について」

※委員長よりこれまでの経緯について説明後、資料「1. 二宮町青少年の現状」
を各自黙読した。

（委員長）3つのグループに分けたが、変更や修正等あるか。今回まとめた際、強い言葉
については、少し弱めたりしている。

（委 員）グループを大きく捉えているのは、議論していく上でいいのでは。

（委 員）二宮町青少年の現状で「スマホの費用は誰が出す？」があるが、ここには大き
な問題があるのではないかと考えている。昔の高校生のバイトは、家庭の援助
ということもあったが、今は、スマホの費用を支払うためなどでバイトをして
いるという理由もあれば、少し問題が大きいのではないかと以前から感じてい
る。

（委 員）これからの話し合いにもなると思うが、人間性のところで、弱い面の記載があ
るが、違う側面から見たら良い面になることもあるから、大人として一つの見
方ではなく色々な角度から見るということも必要である。

（委員長）そういうことも配慮して、今回まとめている。

（委 員）地域の子どもの場合の「地域」の範囲、捉え方は。例えば、〇〇地区を地
域とするのは捉えやすいが、それ以外にグループもあるのではないかと。

（委員長）ここで「地域」が出たが、「家庭・学校・地域」と言われるが、今回まとめてい
くうちに、「地域のなかに家庭、学校がある」方が、説明がしやすいように思っ
た。今までの「地域」の概念を少し変えていかないといけないかもしれない。

（委 員）「社会環境の地域」の継走大会で、高校生の姿が見えないとなっているが、高校

生も参加している地区もあった。継走大会の始まりは、中学校が荒れた時期があったことから、中学生の健全育成、青少年の健全育成で始まった。

- (委員長) 東大跡地を子ども自然塾が利用しているが、どのように利用しているのか。
- (委員) 大規模に開催する土曜日開催は年8回、平日開催は10月から3月まで8回開催予定である。子ども自然塾の願いとしては、自然塾でいろいろな遊びを楽しむことで、それが地域の公園や路地といった地域の遊びに広がっていけばと思っている。
- (委員) この前、自然塾に参加したが、火を燃す場面で、子どもは火の燃やし方が分からなかった。火を燃す環境が現在、無いのでは。昔は、年配の人や先輩が教えてくれた。例えば、災害が起きた時、炊き出しに困ったりするはず。そういったことをどこかで教える、面倒を見るということも課題になったりするのではないかと思った。
- (教育長) 子ども自然塾の取り組みはすばらしく、幼児中心に低学年までの多くの子どもたちと若い夫婦が集まっていて、とてもニーズがある。それをもうちょっと高学年や中学生に広げていきたいが、そこには習い事や塾や部活動などの壁がある。例え自由に遊ぶ環境があっても集まって来ない要因がある。
- (委員) 放課後子ども教室では、子どもたちは体育館で走りまわって汗をかいている様子を見受けるが、地域ではそういった子どもたちの遊んでいる姿を見かけない。子どもたちは平素どこにいるのか。
- (教育長) 家でゲームをしているのでは。
- (委員) スポーツクラブに所属している子たちが、色んな大会で良い成績を残したりと元気な子が多くいるはずなのに、私たちが調べるとそういった子たちが出て来ない。
- (教育長) 保護者にしてみれば、安全が確保されないと子どもを外に出さない。誰か見てくれる人がいれば預けたいが、自分は別で、自分が見守るということではできない。
- (委員) 子どもが下校して塾や習い事に行っても、そこで送り迎えを待つ間などで遊んだりすることもできるが、帰宅してそのまま家に籠る子も多いのでは。いろんな場で、遊ぶ機会が与えられていれば活動ができるが、帰宅して家にいる子はゲームやネットになるのだと思う。
- (委員) 小学4年生でマッチの擦り方は教えているが、経験がないので炎を見ても熱さを感じられない子が多い。使う必然がないので学ばないのであって、親もその必然を感じていないのだろうと思う。子ども自然塾は、親のニーズはあると思うが、親がそれを必然と感じているかどうか。親がどう捉えているのか。資源をいっぱい置いても、その資源には食いつくけども、その資源をもとにして自分から芽を出そうという家庭がどれだけ出てくるのが課題だと思う。
- (教育長) 子ども自然塾に集まる親御さんは二宮町全体の数パーセントだと思うが、縦のつながりでその子たちが幼児から小学校中学校とつながっていけばいいなと思う。また、子ども自然塾だけでなくそういった活動がいろいろ出てくればいい。

子どもが家庭によって多様化している中、健全育成という課題がある。一緒くたにはいかない。

(委員) 子ども自然塾でいろいろな体験をした子どもや保護者が育っていき、それが地域へ広がっていくことで、二宮が変わっていき、遊びがあふれる町になればいいなという願いがある。地域で子どもが遊んでいないというのは、子どもの絶対数が少ないということと、多くの子どもが習い事をしていて、遊びたくても友達と遊ぶ約束ができないという子も多くいるということもあるからではないか。

(委員) サッカーをやっている子の中には掛け持ちでしている子もいたりする。

(委員) 小学校の中学年、高学年くらいから塾通いが目立ちはじめ、塾の他に習い事に行っている子が多い。

(委員) 中学生は部活動や勉強、塾で忙しいという状況で、今回の青少年のテーマに中学生は合うのだろうか。

(委員) 地区でどんど焼きをしたが、小学生を中心とした参加者は 31 人だった。地区の行事には、子どもが参加している。子ども会やPTAなども協力的である。

(委員) 呼びかけてそれだけ子どもがくる地区の親世代のつながりはどうか。

(委員) つながりは良い。子ども会の親のつながりがとても良い。

(委員) 親がつながっていると子どももつながっていく。大人社会の仕組みが子どもに表れている。

(委員長) ある意味では大人の現状が子どもの現状であるといえる。

(委員) 他の地区では、子ども会やPTAの活動が抑えられていて、子ども会の会員も減っているという現状がある。

(委員) やはり地域差がある。

(委員) 子ども会の組織率が 100%のところあれば、50~60%というところもあるのが現状。

(委員) 小学校で、帰宅後の子どもたちの活動についての具体的な調査やアンケートなどをしていないということであれば、何かでしっかりと把握をした方がいいのでは。

(委員) 小学生に関しては、学童保育に行っている子も増えてきていて、学童保育に行っていない子も、帰宅して親の帰りを待つ子も多い。放課後に子どもたちがどう過ごしているかの現状を知る必要がある。

(教育長) 放課後子ども教室は、責任や安全の問題があって、保護者のお迎えがないと登録ができない。保護者が迎えにくるという条件でやってもいいということになった。もし仮に見守る人が多くいて、帰りに家までポイントポイントで立っていてくれれば安全に帰ることができる。参加したいけど親が迎えに来てくれない子は登録できない現状がある。見守り隊が家の近くまでいて子どもを帰らせることが可能であれば、もっと登録が増える。現在、見守る人が少なく目が届かないため、体育館で実施している。もし見守る人が多くいれば、子ども自然塾のように外で遊ばせることができる。

(教育長) 小学生はまだしも中学生の健全育成は難しい。半強制的でないで、育成の場に出てきてくれない。一方で、地域がしっかりしているところは継走大会や地域の行事に、出てくる中学生もいる。

(資料「2. 大人は青少年に対してどうすればよいのか」を各自黙読)

(委員長) 資料を読んで何か気づかれたことなどはあるか。

(委員) 「地域」が中心となっている。地域がしっかりやっていけば、家庭も学校も大丈夫と、地域への責任を感じる。まずは家庭ではないかと思う。家庭がしっかりしていかないとなかなか地域が育っていかない。地域中心で考えていくと難しいのでは。

(教育長) その通りであるが、家庭にしっかりしてと言えない現状がある。本来家庭ですべきことを家庭ができず、学校などに求めたりする状況がある。そういった家庭をどうやって支援するのかとなると、地域が出てきて、地域社会の助けが必要となってくる。

(委員) 先週、小中学校5校のPTAで恒例の合同事業をやったが、思いのほか子どもが集まらなかった。参加していた山西小PTAの会長は、よく地域の子どもの知っていて、めぐみ幼稚園にある親父の会のような、親父同士のつながりを持ちたいようで、地域でのつながり、地域でのネットワークを少しずつ広げていきたいという想いを持っていた。先進的なところで一色小学校は、保護者と地域の方が草刈などをやっている。なかなか厳しい部分もあるとは思いますが、そういったことを続けていかないと広がっていかないのでは。

(委員) めぐみ幼稚園では、お父さんの会があって、流しそうめんなどのイベントを企画してやっている。そのお父さんたちが、卒園後、PTAや子育て連などで活動をしている。

(委員) 例えば、子ども会や青少年指導員連絡協議会などの今ある組織に協力してもらって、何か地域で展開していけないか。

(委員) 先ほどの地区のどんど焼きは、地区から子ども会へ依頼している。

(委員) 子ども会の連合会があると思うが、正式な名称は。

(事務局) 子ども会育成会連絡協議会が正式名称で、各地区に単位子ども会があり、それをまとめている。

(教育長) 結局、各地区の活動がやせ細ってきていて、青少年指導員やスポーツ推進委員や子ども会においても、単位である地区での活動が難しくなり、二宮全体での活動へとパターン化してきている現状がある。

(委員) 地区での活動が無くなってきている。復活させることができれば。子どもが何に関心を持っているのかを知り、新しい組織を作るのは難しいので今ある組織を利用できるといい。

(委員) 最近の小中高校生の親は、仕事をしていることもあり、役員をやることだけでなく、地域や町の行事に積極的に出たがらない。そこを引っ張りだせるかどうかだと思う。

(委員) 小さい頃から子どもを通じて、親のつながりがあれば、地区の行事へも目がい

くのかなと。

(委員長) 何らかのきっかけがないと難しい。

(委員) 一色地区で餅つき大会をやり、150人ぐらいが参加した。来ている保護者は幼児から低学年の保護者で、行事の運営をするのは60代後半から70代。中堅の世代が出てこない。もっと保護者が出てくる行事をやりたくても、昔からの繰り返しとなっている。新しく引っ越してきた人は分からない。こういった人たちを地域に関わらせるのは難しい。

(委員) 子ども会の役員になり手が無いという話が出たが、子育連本部は小学生の親でなくても役員になれるが、地区の単位PTAでは、小学生を持つ親が役員になっている。全国を見ると、小学生の親でない方が役員をやっているところもある。役員になり手がいないという状況で、地域の方に役員になってもらい活動してもらおうということを、教育委員会から子ども会に投げかけや指導などはできないのか。

(事務局) 指導はできないが、役員が集まらない状況での一つの方法として、提案することはできる。

(委員) 子育連定例会でこれからの役員のあり方についての提案があると、ヒントになっていい。

(事務局) 子育連の本部役員と会う機会があるので、社会教育委員会議会でそういった話しがあったということは伝えられる。

(委員) そもそも地域に余力があるのか。

(委員) 余力はないのでは。一人で何役もやっているのが実情。

(委員) 地区の役員を出すだけでも難しいなかで、地域にそこまでの余力がない。

(教育長) なんでもかんでも地域のお年寄りに任せて、それを若い人は当たり前で思っているところがある。親が子どもの面倒をみたいが、時間がなく見ることができないといった社会状況のなか、子どもを遊ばせてあげたいがどうしたらいいのかということだと思う。

(教育長) 小学生と中高生を分けて考えた方がいい。中高生は地域で大人がやっていること、自治会活動で中学生なりにできることをして、地域の大人になる練習をさせる。小学生は遊ばせる。遊ばせる場所と見守りをする人を確保する。どうやったら子どもを見ることができない親の代わりにやってあげられるか。社会教育委員としてこれから具体的な行動をどうするのか。基本は、地域の大人のつながりが深まるような、大人への働きかけがどうしたらできるのかが課題になってくる。

(委員長) 社会教育委員がまずできることを何かやらないといけない。簡単なことでも。大人が先にやる、率先して何かをやる。大人が子どもをよく理解して、大人が地域に参加するように、何かできるのでは。出来ることを出来る場所から。

(教育長) 保護者と地域の各役員をつなぐりをどうやったら作るのかが課題かもしれない。保護者が地域に出る手立てがないのか。

(委員) 各役員が地区の集まりで、地区の情報を共有していくことができれば。

- (委員長) 子どもは子ども会に入りたいけど、役員がまわってくるから入らないといった悪循環がある。もっと気楽に地域に保護者が出ていければ。
- (委員) 地域ではなく家庭ですべきことではないかとあったが、今の子育て世代の現状を考えると、父親は長時間労働で、母親も色々な分野で責任を持って働いていて、経済的なことや自己実現で働きたいという人が多い。役員をやる余裕がないのが現状。地域で育てるといって町内会というイメージがあるが、町内会ももう力が無くなってきている。地域で育てるといって町内会ということから立ち返って考えていかないと難しい。子ども食堂などのグループも立ち上がってきていたりするが、町内会でない地域としてどういうことができるのかという視点で見えないと苦しいのでは。
- (委員) 町内会では、行事をこなしているというのが現状である。
- (委員) そういった状況で、何が地域なのかと。
- (教育長) 地域はあるけど、地域社会ができていない。町内会役員だけが地域社会を支えていて、一般の人が助け合う地域社会にまだなっていない。何とか 1%でも地域社会を作ろうとしていかないといけない。
- (委員) 二宮はまだ残っている方かもしれない。地域活動で顔が見えている。
- (委員) 町内会でも子ども会でも、地区によって状況が違う。
- (委員) 子ども会は厳しい。役員を義務でやっているというのが現状である。有志がイベントを企画したが、参加申し込みが少なかったという。
- (委員) 子育てや家庭生活での優先順位が変わってきている。子ども会の役員のなり手がいないというのは、母数が少ないから繰り返しやらないといけないということと、スポーツクラブなどの関わりが大きい。土日にクラブの試合やイベントがあって、子ども会に登録していても出ることができないから登録しないということも多いと聞く。母数を増やしていくには、お互いに折り合いをつけていかないと厳しいという現状がある。
- (教育長) 地域での活動を義務感で行っている人が増えてきた。喜びや生きがいを持って参加や活動していない。
- (委員長) 次回までに社会教育委員として出来ること、小さいことでも自分ができることを 1つ 2つ考えてほしい。今回のまとめに、付け加えていく。

3 その他

※事務局より配布資料の説明

4 閉会

16時01分閉会